別役 実著

当世・商売往来

岩波新書

8

別役　実著

当世・商売往来

岩波新書

8

別役　実

1937年旧満州に生まれる
劇作家
著書―「マッチ売りの少女／象」「にしむくさむらい」「淋しいおさかな」「そよそよ族伝説」「虫づくし」「道具づくし」「別役実の犯罪症候群」「電信柱のある宇宙」など

当世・商売往来　　岩波新書(新赤版) 8

1988年1月20日　第1刷発行 ©

定価 480円

著　者　別役実（べつやく みのる）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・三陽社　製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan
ISBN4-00-430008-8

もくじ

I

総会屋（3）
セールスマン（10）
地見師（17）
両替屋（24）
お笑いタレント（31）
ペット・ショップ（38）
保険金取得業（44）

II

探偵（53）
ダフ屋（60）
カメラマン（67）
押し屋（74）
料理評論家（81）
自動販売機（88）
こえかい（95）

高賣往来

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

III

喫茶店（105）
示談屋（111）
有名人（118）
やくざ（125）
行列屋（132）
銭湯（139）
宗教家（145）

高貴往来

IV

電話の時間貸し屋（155）
俳優（162）
緑の小母さん（169）
動物園（176）
当り屋（183）
主婦（189）
つなぎや（195）
いたこ（201）
君主（207）
あとがき（214）

高貴往来

（『図書』一九八五年八月号――一九八七年十二月号連載に加筆、「いたこ」は新稿）

カット＝守貞漫稿「類聚近世風俗志」より

I

街角に立って「あなたは何ですか」と質問をした場合、「私は哺乳類です」と答える人間はいない。多くは、「サラリーマンです」「商人です」「百姓です」と、その職業を言うのである。つまりここへきて我々は、生物の一種であるとの自覚を失い、職業人の一種であるとの自覚のみで、生きはじめたのである。

総会屋

わが国における戦後民主主義が生んだ商売のひとつであり、各企業の株主総会をはじめとして、あらゆる団体の「総会」に関与し、会議が民主的に運営されるべく尽力する技術者集団である。言うまでもなく、欧米の先進諸国における民主主義体制に「総会屋」の介在する例は全くないことから、わが国の民主主義体制の特殊性を説明するものとして、このところにわかに注目されつつある存在と言えるであろう。

おおむね「総会」というのは、その団体の構成員全員が出席することを旨とし、その団体の最高議決機関であるから、一歩その運営を誤ると、団体そのものの存亡にも関わりかねない。したがって会議は破綻なく、常に円滑に運営されるのが望ましいのであるが、同時にわが国においては、理事者側の提案が何の批判も受けずにそのまま承認され、それが

あまりにも破綻なく、あまりにも円滑に運営されすぎた場合、これを「シャンシャン大会」と称して、あたかも民主的に運営された会議ではないかのようにみなす風潮がある。わが国がいまだ民主主義的にさほど洗練されてなかった時代、理事者側はあらかじめ全出席者に対し、提案に対する一切の批判をしないよう、暗黙の、もしくはあからさまな脅迫を行い、それによって会議の運営効率を上げていたのであるが、それをしていないという証拠が、どこにもないからである。

そこで、会議が民主的に運営されたということを自他ともに確信するためには、理事者側の提案に対する適度の批判が、どうしても必要である。しかし、我々は体験的に誰でも知っているが、この場合の「適度」ということがきわめて確かめ難い。論理的には、「総会」を破綻させ、その団体の存立を危くするほど過激でもなく、かと言って「シャンシャン大会」とおとしめられるほど妥協的でもない範囲に、それが確かめられるはずなのであるが、現場感覚ではこの塩梅がつかみ難いのである。おそらく、わが国における戦後民主主義は、この「適度」を確かめる悪戦苦闘の歴史だったと言っても、過言ではあるまい。

当初理事者側は、前時代の記憶に縛られ不安そうに沈黙し続ける一般出席者から、いか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に活発なる批判を誘発するかに腐心した。理事者側の提案が終ると、議長は必ずこう言ったものである。「反対意見はありませんか。反対意見があってもいいんですよ。ここではそれぞれがそれぞれの意見を出しあって、民主的に討論する場ですから。」にもかかわらず、一般出席者は油断なく、沈黙し続けたのだ。そこで理事者側は、提案の中にわざと批判を誘発する部分を作り、それでも一般出席者が沈黙し続ける事態を予想して、理事者側の意を体した会議専門家を出席者の中に忍びこませ、あえて彼等に批判させることまでしたのである。つまり、この会議専門家が後に「総会屋」となるのであり、歴史家はこの時期を「民主主義の教育時代」と呼んでいる。

もちろん、一般出席者はたちまち教育された。「総会屋」の先導により批判することの喜びを知った彼等は、文字通り水を得た魚のように、理事者側を困らせ、立往生させるために、あらん限りの情熱を傾けはじめたのである。会議が終ると、もよりの居酒屋にたむろし、「俺は今日、奴等をグウの音も出ないほど痛めつけてやったぜ」と主張しあうことで、一般出席者は彼等の民主主義について、確かめあったのだ。言われているところの「民主主義の開花期」であるが、かと言って「総会屋」の役割がそこで終ったわけではな

かった。

勢いのおもむくところ、批判は次第に細分化され、重箱の隅をつつくような「あげ足とり」や単なる「いちゃもんつけ」に終始し、それに苛立ちを覚えた理事者側は、問題の基礎に関わるもっと本質的な批判をするよう、「総会屋」にその模範を示させる必要を感じはじめたからである。「総会屋」はそれを示し、一般出席者は直ちにそれに従った。「民主主義の成熟期」である。

しかしこの「成熟」は、同時にある危険性をも内包していた。「総会屋」の手本に従って、細部にとらわれることなくもっと本質的な批判、もっと深い疑いを抱くよう訓練された一般出席者は、やがて理事者そのものに対する不信、「総会」そのものの破壊を目指しはじめたからである。もちろんそれが可能であることを一般出席者が自覚しはじめたということは、民主主義における輝かしい成果に違いないが、その結果、多くの団体における理事者が不信任案によって退陣し、多くの「総会」が分裂し、多くの団体が解散した。「民主主義の過熱期」であり、我々は、民主主義的情熱があまりにも本質的に、あまりにも素直に発揮されると、結局は民主主義そのものを停止せざるを得ないことを、知ったの

である。

ただし、もうこのころになるとわが国の民主主義はすでに充分に手なずけられていたから、我々はこれに冷静に対処することが出来た。問題は簡単ではないか。これまでの歴史をふり返ってみれば、「総会」における不安定要素が一般出席者の「民主主義的情熱」にあることは明らかである。そしてまた、それをかろうじて安定させてきたものが、「総会屋」の「民主主義的技術」にあることも、これまた明らかである。だとすればこの「民主主義的情熱」と「民主主義的技術」を、それぞれに分離して分担させるべく「総会」におけるシステムを変えてしまえばいい。

つまり、理事者側に対する批判は、「総会屋」だけしかしてはならないのである。彼等は技術者であるから、「総会」を破壊するほど強くなく、「シャンシャン大会」と言われるほど弱くなく、その批判の強度を塩梅することが出来る。しかも一般出席者も、自分たちの意志で、自分たちの金でその「総会屋」を雇っているのであるから、そのことを通じてそれぞれの「民主主義的情熱」を、発揮しているかに感じとることが出来る。

このようにして「総会屋」は、過渡的な疑似出席者であることから、「総会」における

「民主主義的技術」を司るものとして、正当な立場を与えられたのであり、同時に、歴史家はこの時期より以後を「民主主義の完成期」と呼ぶのである。もちろん現在でも、こうした歴史的過程を知らない一般出席者が、「民主主義的情熱」のおもむくままに、「総会屋」を押しのけて自ら批判に乗り出したりする例もないではないが、これは「総会屋」によって直ちに会場の外へつまみ出されることになっているから、間もなくそうした人々も「そんなことをしてはいけないのだ」ということを、教育されることになるだろう。

ところで現在、わが国のあらゆる「総会」から「総会屋」を締め出すべきであるとする主張が、ひそかに囁やかれはじめ、一部で実行に移されつつある事実は、誰でも知っている。おそらくは、欧米の先進諸国の民主主義体制に「総会屋」の介在する例が全くないことから、欧米かぶれの文化人あたりが煽動しているのであろうが、思い違いもはなはだしい。わが国の民主主義体制が「総会屋」を生み出していった過程の、論理的必然性について考えれば、欧米の先進諸国の民主主義体制の方が、疑われてしかるべきであろう。一体彼等は、「総会屋」のいないところで、どのようにして一般出席者の「民主主義的情熱」を誘発し、かつその暴発を防いでいるのであろうか。

民主主義思想は欧米の先進諸国から移入されたものだとしても、わが国は現在それをわが国独自の方法で手なずけつつあるのであり、そのことについてとやかく言われることはない。間もなくわが国では、「総会」を「総会屋会」にしようとまでしている。一般出席者は、出席する必要もなくなるのだ。

セールスマン

「ウィリー・ローマンはセールスマンだった」と、アーサー・ミラーの戯曲《セールスマンの死》の中で、隣人チャーレーは言っている。「セールスマンには、底のない生活が待っているだけなんだ。ボルトにネジをつけないのと同じさ。規則もなけりゃ、使う薬もありゃしない。靴をテカテカ光らして、ニタニタ笑いながら、フワフワとあの青空の向うに浮いている人間なのだ。だからさ、笑いかけても笑い返してもらえなかったら、一大事ってわけだ。セールスマンというものは、夢に生きてるものなんだ」(菅原卓訳より)。

日本語では、行商もしくは訪問販売員という。押売りはその変種である。しかし、店舗を構えて商品を販売する一般の商人と、商品もしくは商品見本をカバンに入れて訪問販売をする行商との、この奇妙なニュアンスの違いは、一体どこからくるのであろうか。単に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com